落語「饅頭こわい」の原話

岡田　充博

一

今回は「饅頭こわい」を取り上げてみたい。落語といえば必ずこの名が浮かぶ、最もポピュラーな噺である。ことさら内容紹介の必要もない気はするが、一先ず東大落語会編『増補　落語事典』（青蛙房・改訂版、一九九四年）を借りて、あらすじを記しておこう。

若い者が大勢集まって、話をしているうちに、ヘビがこわいといい出した者がいる。つづいて他の者がナメクジがこわい。カエル、アリ、オケラ、クモ、ウマ、ナンキンムシなど、つぎつぎにこわいものが上げられると、最後に松〔1〕という男が、まんじゅうがこわいという。一同はからかい半分に、いろいろまんじゅうの名を上げると、松は気分が悪くなったと、となりの部屋で寝込んでしまった。あいつはいつもいばっているから、こらしめてやろうと、みんながまんじゅうを買って来て松の枕もとにつんで置く。外からようすを見ていると、松は「こわい、こわい」といいながら、まんじゅうを食べ出した。計略にまんまとかかったのに気がついた連中は怒って「ほんとはなにがこわいんだ」「ここらでよいお茶が一杯こわい」

（四一五頁）

右の梗概は東京の落語をもとにしたもので、十五分か

ら二十分ほどに短くまとめられるのが普通である。しかし、上方では様々な恐い話がさらに織り込まれ、怪談もどきの挿話まで登場して、一時間にもわたる大ネタに膨らんでいる。ただ、その詳細は市販のCDやDVDで視聴していただくことにして〔2〕、例によって原話探しに話題を向け、ここから小稿を始めることにする。

二

「饅頭こわい」の元になった話については、すでに落語研究家の指摘があり、江戸の小咄からさらに中国明代の文献に及んでいる。最も詳しい武藤禎夫『定本落語三百題』(岩波書店、二〇〇七年)の解説は、次のように言う〔3〕。

元来は中国ダネと見られ、『五雑俎』(明)巻十六・事部や『笑府』巻十二・日用部「饅頭」に出ており、前者は寛文元年、後者は明和年間に、その和訳抄出本で日本に紹介された。「饅頭」(一ノ富・安永五)、「饅頭」(気の薬・安永八)、『訳準笑話』(文政七・無題)などにも見え、その話は現行の落語のサゲと全く同一である。曾我休自の仮名草子『為愚痴物語』(寛文二)巻三第十六話「野間藤六女を誑し餅くふ事」には、以下の話が出ている。

藤六が傍輩や女房たちとこわいものを語り出すが、藤六だけは「こわいものはない」と言い張る。女房たちが「何かこわいものがあるだろう」ときくと、小声で「暖かい小豆餅がこわい」と言うので、町屋から取り寄せて藤六の目の前にさし出す。すると藤六は、「おそろしや」と言いつつ十四、五も食べてしまい、その奇智を主君の織田信忠に賞められた。この話は『五雑俎』を脚色したにしては出来すぎなので、実際にあった頓知噺を御伽衆的存在の野間藤六に仮託したものであろう。……　(四〇八頁)

同書はさらに、烏亭焉馬撰・美満壽連作『詞葉の花』〔4〕に見える次の小咄を紹介している。

○饅頭　東西南北平作

「あいつは下戸のくせに、饅頭を見ると『こわいこわい』とぬかす。何でも空店へ入れておいて、一蒸籠買って来て、饅頭攻めにしてやろふ」と友達が言合せ、引摺って空店へ入れ、戸の間から饅頭をやたらに投込めば「アヽ、こわい、恐ろしい」と騒ぎしが、のちには音もやみける。「コレサ。あんまり皆が饅頭ぜめにしたゆへ、大方目をまはしたであろふ」と、戸を明けて内へ入り見れば、五十ほどの饅頭を、たった一つか二つ前へ残しおき、つくねんと

している。「べらぼうめは、『饅頭がこわいこわい』とぬかして、皆食らってしまった。人をばかにした」といへば、につこりとして「アヽ、いい茶が一ッ杯こわい」

このように江戸期の日本で持てはやされ、幾つもの翻案を生みだした「饅頭」の笑話であるが、もとの中国では、どんな話だったのであろうか。『五雑組』は謝肇淛（一五六七～一六二四）の雑録集、『笑府』は馮夢龍（一五七四～一六四六）の笑話集と、いずれも明末の文献で、収録の「饅頭」の話は殆ど同じ内容である〔5〕。ここは幾分叙述が丁寧な前者により、岩城秀夫訳『五雑組』（平凡社・東洋文庫、一九九八年）で紹介してみよう。

ある貧書生が饅頭を食べたいと思ったが、然るべき考えも浮かばなかった。ある日、市場で饅頭を並べて商売をしているものがいるのを見るや、大声をあげて地面に倒れた。

主人が驚いてたずねると、

「わしは饅頭がこわい」

という。主人は

「そんな馬鹿なことがあるのだろうか」

と思い、饅頭百個を用意して、空き部屋の中に置き、書生を閉じこめて、外から様子をうかがっていたが、ひっそりとして物音ひとつしない。壁に穴をうがって窺うと、半分以上を食べてしまっていた。早速戸を開けて、その理由を詰問した。書生が、

「わしは今日これを見ると、ふとこわくなくなった」

というので、主人は欺されたと知って、怒鳴りつけて、

「貴様には、ほかにまだこわいものがあるのか」

といったところ、

「この上は二杯の臘茶がこわいですな」

といった。

（第八冊、一八八～一八九頁）

短い話を気の利いたサゲで結んでおり、しかもポピュラーな落語の原話ということで、最近は高校の漢文教科書にも顔を覗かせている〔6〕。ただこの話では、主人がわざわざ空き部屋に百個も饅頭を用意して書生を試すくだりに、幾分無理が感じられる。落語はそこのところを、町内の嫌われ者への仕返しという、ありそうな設定に上手く変えているのである。なお「臘茶」は、岩城氏の訳注によれば「臘面茶」ともいい、ミルク状のものが湯の面に浮かび、蝋をとかしたように見えることから名付けられたという。教科書の注には、福建省産の銘茶と

ある〔7〕。

ところで、武藤氏が挙げる中国の原話は明末の二書であるが、実はこの話、もっと古い来歴を持つようである。宋代、学者・政治家として知られた葉夢得（一〇七七～一一四八）の『避暑録話』巻下に、「畏饅頭」と題した一文が見える。清廉無欲を標榜しながら貪欲この上ない役人を皮肉ったもので、ここに「饅頭こわい」の笑話が引かれている〔8〕。文章の中途までを、拙訳で示してみよう。

書物を読んで学んでも、科挙を受験しなければそれまでのこと。だが学問をして受験し、合格を望み、合格して仕官し、仕官して昇進するのは、仮にも道に外れなければ、良くないことがあろう筈はない。

それなのに世の中には、仕えて禄を食んでいながら、高邁を装って出仕しないのを立派だとし、職を棄てるそぶりをする輩がいる。しかし、これがどうして彼等の本音であろうか。だから彼等が事をはじめると、仕官を願う連中よりもひどいものがある。関わり与れないことにも割り込んできたり、殊更つまらぬ異議を唱えて辞職をほのめかしながら、結局ずるずると居座る。それで往々にして虚名を博し、結構な官職を得て辞めないのに、世間は最後まで気づかないのである。

こんな話がある。貧乏書生がいて、饅頭の味を知らなかったが、口にする手立てもない。ある日、市場で並べて売っているのを見つけ、大声を挙げ地面に倒れた。……

以下、『五雑組』と同じ「畏饅頭」を譬え話として紹介し、清廉ぶって実は貪欲な役人連中をこの貧乏書生に重ね合わせ、最後は「此れ豈に仕へざるを求むる者ならんや」と結んでいる〔9〕。

北宋から南宋にかけての人である葉夢得の随筆は、この笑話が意外に古い来歴を持っていることを教えてくれる。とすると「畏饅頭」は、あるいは宋代よりもさらに遡る時代に生まれた話だったかも知れないのである。

三

さて、それではこの「饅頭こわい」は、一体何処まで遡ることができるのであろうか。

管見するところ、偽って饅頭を怖がる話は、『避暑録話』以前には探し出すことができない〔10〕。したがって直接の原話としては、葉夢得が書き留めておいてくれたこの資料が、やはり最古のものということになりそうである。ただ、饅頭やお茶にこだわらず、「わざと怖がって相手を騙して利益を得る」という話の基本構造から類話を探すならば、もっと古い小説

資料に面白い話が見える。

『太平広記』巻三二五・鬼部に「王瑤」と題して、南朝斉の祖冲之『述異記』から次の話が引かれている〔11〕。

南朝宋の大明三年（四五九年）、王瑤という者が都（建康、現在の南京）で病死した。彼の死後、痩せて長身で色が黒く、肌脱ぎで犢鼻褌（ふんどしの一種、形が子牛の鼻に似ているところからこの名があるという）を着けた姿の幽鬼が現れた。いつもその家にやって来て、歌をうたったり人語の真似をしたり、挙げ句にしょっちゅう食べ物のなかに汚物を投げ込んだりするのだった。また東隣の庾氏の家でも人に悪さをし、王氏の家と同じことをする。庾はそこで幽鬼に言ってやった、「土くれや石ころなんぞ投げられても少しも怖くはないが、もし銭を投げ込まれたら、本当に困ったことになる」。すると鬼は、新銭数十枚を庾の額に投げつけてきた。庾はまた言ってやった、「新銭なんかでは痛くもないが、ただ烏銭だけは怖い」〔12〕。すると、鬼は烏銭を投げつけてくること前後六、七回、庾は合わせて百余銭を手に入れたのであった。

怖がるものは饅頭ではなく銭であるが、話の骨組みから言えば、これもまた「饅頭こわい」の原話ということが出来る。さらに興味深いことにこの話は、「何がこわい」や「たのきゅう」など日本の昔話にも多くの類話を持ち、なかでも「たのきゅう」は、落語「田能久」としても語られている〔13〕。一方、中国ではどうかというと、日本とは異なって「畏饅頭」以外には類話を持たず、むしろ幽鬼をやっつけることを主題とした、「不怕鬼的故事（鬼を怖がらない話）」の話群へと広がってゆくようである〔14〕。

「王瑤」をめぐるそうした日中両国の類話については、稿を改めて取り上げることにし〔15〕、ここでは今一度、原話をめぐる考察に戻ってみよう。

さて、こうして六朝志怪小説にまで辿り着いてみると、さらに遡ってみたい欲が出る。「わざと弱みを見せる振りをして利を得る」話は、もっと古い文献に見られないであろうか。原話を直接的なものに限定せず、笑話という枠までも取り外してしまうと、戦国時代の有名な事件が思い浮かぶ。

司馬遷『史記』が伝える数々の歴史物語の中に、兵法家孫臏の仇討ちの話がある。

同学の龐涓に才能を妬まれ、無実の罪で足切りの刑に処せられた彼は、後に斉の威王に軍師として仕え、魏の将軍となった龐涓を打ち破る。この戦いで、孫臏は斉の将軍田忌に策を授けて次のように言う〔16〕。

「あの三晋（韓・魏・趙）の兵は、元来、精悍勇猛で、斉を軽んじ、斉の兵を臆病者とよんでおります。ところで、戦争に巧みなものは、あたえられた形勢をうまく利用して、われにに有利になるように導きます。…（中略）…　敵はわが斉が臆病だと思いこんでいるのですから、わが軍が魏の地にはいった日には十万個の竈（かまど）をつくらせ、翌日には五万個の竈、そのまた翌日には三万個の竈を作らせてください」

つまり、竈の数で脱走兵が相継いでいると見せかける作戦である。田忌はこの計略を早速実行に移す。斉軍を追う龐涓は、それを見て逃亡者が半数以上にもなっていると喜び、率いる兵を軽装備の精鋭部隊に絞って急迫する。一方、龐涓はその速度から日暮れに馬陵の地に至ると計算し、そこを決戦の場として伏兵を置く――。

物語はここから、よく知られたドラマチックな展開となる。馬陵は道が狭く、両側は険峻な山で待ち伏せには格好の地であった。孫臏は路傍の大樹の皮をはぎ、その白い木肌に「龐涓、此の樹の下に死せん」と墨書し、道をはさんで弓の名手たちを配備した。そして「暮れに火が見えたなら、そろって矢を放て」と命じる。果たして暮れ方、龐涓は樹下に至り、火を起こして木肌の文字を読もうとした。その時、満を持した斉軍の弩弓が一斉に発射され、進退窮まった龐涓は、「遂に豎子（小僧）の名を成さしむ」と吐き捨てて自刎する。

余りに出来過ぎた展開で、早くから小説的な脚色を疑われているが[17]、それはさておき、この物語を形作っているのは、「わざと弱みを見せて敵を欺き、勝利を得る」という、これまでの話と同様な策略である。事実、孫臏はこの策略を得意としていたようで、一九七二年に山東省臨沂（りんき）県の漢墓から発掘され話題を呼んだ、竹簡の彼の兵法書には、「禽（擒）龐涓」「官一」「十問」などの篇に、そうした戦術が幾度も顔を覗かせている[18]。

「饅頭こわい」の松つぁんの悪知恵も、辿ってゆけばシリアスな兵法の流れを汲むものだったのである。こんな風に見てくると、全編笑いに包まれたこの落語の裏に潜む、イジメと仕返し・奸計といった人間の暗い本性が、改めて浮かび上がる思いがする。もっとも、そうした暗さを全く感じさせないところが落語の落語たる由縁であり、それを底から支えているのは、厭なやつと嫌いながらも町内・長屋の一員として暮らしている、下町の庶民の共同意識であろう。無論この「共同意識」なるものについては、功罪両面を指摘する声が挙がるに違いない。しかし、少なくともそれが全く消え去った場においては、噺のなかに出てくる例のギャグも、笑いとして通用しな

いのではないだろうか。

「饅頭であいつが死んじまったら、アン殺ですよ！」[19]

四

以上、「饅頭こわい」の原話をめぐって明代の笑話から始め、孫臏の故事まで遡ってみた。取り上げたどの話も見事計略が功を奏しているが、しかし、いつもこの手が成功するとは限らない。龐涓は別として、町内の連中や褌姿の幽鬼が騙されたのは、余りに人が（鬼が？）良すぎたせいであろう。そこで、この逆をゆく応用編も必要となってくる。『後漢書』巻五八・虞詡伝に載るその話を紹介して、結びに代えることにする。

羌族が武都郡（甘粛省）を侵略した際、将帥としての才略を鄧太后に買われた虞詡は、武都太守へと転任した。赴任の途中、羌族に阻まれた虞詡は自軍を停止させ、「上書して援兵を要請し、その到着を待って軍を進める」と宣言した。それを聞いた羌族が四方に散って略奪を始めると、詡は行動に出る。彼は一日の行程を倍にして進軍し、その上に軍吏と兵士にそれぞれ竈を二つずつ作らせ、日ごとに増やして数を倍にした。このため羌族は敢えて近づこうとしなかった。

この作戦について尋ねられた詡は、次のように答えた。

「敵の軍勢は多く、我が兵は少ない。ゆっくり行軍すれば追いつかれやすく、速く進軍すれば相手には分からない。また我が軍の竈が日ごとに増えてゆくのを見れば、敵は必ず郡兵が迎えに来たと思うであろう。軍勢が多く行軍が速ければ、必ず我が軍を追撃することを憚ろう。孫臏は自軍の弱さを示したが、私は今、強さを示している。形勢に異なるところがあるからだ。」[20]

注

1　主人公の名前は、あるいは「辰」「盛」「ミツ」など、演者によって異なる。

2　市販のCDやDVDの主要なものを調べるには、矢野誠一・草柳俊一『落語CD&DVD名盤案内』（大和書房・文庫、二〇〇六年）が便利である。これによれば、東京の落語家では、五代目古今亭志ん生や五代目柳家小さん、上方では六代目笑福亭松鶴、三代目桂米朝、二代目桂枝雀のものなどがある。同書によれば、この噺は上方の方が古く、これを大阪から東京に移したのは三代目蝶花楼馬楽であるという。

3　武藤氏には、他にも『江戸小咄辞典』（東京堂出版、一九六五年）、『江戸小咄類話事典』（東京堂出版、一九九六年）などの著作があり、前者では「饅頭」の項（三八三～三八四頁）、後者では「下手物食い」「只食い只飲み」の項（七九頁、一四〇頁）に関連記事が見える。なお、『五雑俎』は、『五雑組』が正しい。

4　『詞葉（ことば）の花』は、武藤禎夫編『噺本大系　第十三巻』（東京堂出版、一九七九年）、武藤禎夫校注『化政期落語本集　近世笑話集　下』（岩波書店・文庫、一九八八年）などに収録されている。『定本落語三百題』の引用には、表記に若干異なるところがあるので、岩波文庫本にもとづいて引用した（五一～五二頁）。

5　両書の原文を左に挙げておく。先ずは『五雑組』、上海書店出版社の歴代筆記叢刊本（二〇〇一年）による。

有窮書生欲食饅頭、計無從得。一日見市肆有列而鬻者、輒大叫仆地。主人驚問。曰、吾畏饅頭。主人曰、安有是。乃設饅頭百枚、置空室中閉之、伺於外、寂不聞聲。穴壁窺之、則食過半矣。亟開門詰其故。曰、吾今日見此、忽自不畏。主人知其詐、怒叱曰、若尚有畏乎。曰、更畏臘茶兩碗爾。（三二五頁）

次に『笑府』、こちらは内閣文庫所蔵の明刊本による。

饅　頭

有貧士餒甚。見市有鬻饅頭者、僞大呼仆地。主人驚問其故。曰、吾性畏饅頭。主人因設數十枚于空室中、而閉士于内、冀相困以爲一笑。久之寂如、乃啓門、見其搏食過半。詰之、則曰、不知何故、忽不覺畏。主人怒叱曰、汝得無尚有他畏乎。曰、無他。此際只畏苦茶兩碗。

なおこの「饅頭」であるが、宋の高承『事物紀原』巻九は、梁の殷芸『小説』から諸葛孔明の逸話を引いて起源を説明している。曰く、孔明が南征した折、邪神に人の首を捧げる蕃地の習俗を改めるため、羊や豚の肉を麺で包んで人頭に代えたのが始まりという、と。高承は続けて晋の束皙の賦などに「饅頭」あるいは「曼頭」の語が見えることを挙げ、饅頭は孔明から始まるのであろうかと結んでいる。孔明の話の真偽のほどはともかくとして、晋の時代にすでに、饅頭なるものが存在したことは確かである。

また、現在の中国の「饅頭（マントウ）」は、一般に小麦粉を使った蒸しパンを指し、なかに餡が入っていない。餡や肉・野菜などの入ったものは「包子（パオツ）」と呼ばれるが、宋の黄休復『茅亭客話』巻九の「蠶饅頭」に、「将に肉・麺を買いて家に帰り、饅頭を造りて之を食さんとす」、同じく宋の魏泰『東軒筆録』巻十五「書字肥瘦」に引かれる欧陽脩の言葉に、「書の肥えたる者は譬えば厚皮の饅頭の如く、之を食するも未だ必ずしも佳ならず」などとあるところからすると、この時代の饅頭は皮と餡からなっていたようである。「饅頭」についての論考には、早く青木正児『中華名物考』（春秋社、一九五九年／同社『全

集』第八巻、一九七一年）の「唐風十題」（七、饅頭）があり、孔明起源説を俗説として退けている。

『五雑組』の作者謝肇淛の「淛」についても付け加えておく。この字は通常「セイ」と読まれるが、岩城氏訳書の解説によれば、生母の出身地浙江に因んで付けられた名で（「淛」は「浙」と同じ）、「セツ」と読むのが正しい（第一冊二九六頁）。

6　影山輝國・室城秀之『古典　漢文編』（教育出版、二〇〇四年）には、「機知と笑い」の章に『五雑組』から、柴田武・金谷治・他『高等学校古典［漢文編］』（三省堂、二〇〇四年）には、「小話」の章に『笑府』から、それぞれ「畏饅頭」と題してこの話が載せられている。

7　「臘茶」は「蠟茶」とも書かれたようで、布目潮渢『中国茶の文化史　固形茶から葉茶へ』（研文出版、二〇〇一年）に、より詳しい記述がある（九六頁）。それによれば、宋代には天下の関心が集まったほどの高級茶で、帝室用の龍鳳茶系統のものだったようである。元の王禎『農書』には、「蠟茶は最も貴くして、製作もまた凡ならず。上等の嫩芽（蒸製緑茶の若葉の部分）を択び、細かく碾り、」云々とある。饅頭を腹一杯ただ食いした上に、厚かましく高級茶が飲みたいと言っているわけで、「苦茶」とは別の面白さが加わる。

また、『五雑組』では「臘茶兩碗」、『笑府』では「苦茶兩碗」と、いずれも「二杯」となっている。「臘茶」の場合、二杯と欲張ったとも考えられるが、「苦茶兩碗」から推し量って多分そうではなく、日本の「一杯」と同様、ちょっとした分量を表す語感であろう。しかし、では何故一杯ではなく二杯と言うのか、その辺りの微妙な事情ないしはニュアンスが知りたい。乞示教。

8　実はこの話も、稲賀敬二・森野繁夫・他『高等学校　古典漢文編』（第一学習社、二〇〇四年）第一章の「随筆・紀行」の項に収録されている。

9　『避暑録話』の原文は次の通り。文淵閣四庫全書本により、段落・句読を加えておく。

讀書而不應舉、則已矣。讀書而應舉、應舉而望登科、登科而仕、仕而以叙進、苟不違道、于義皆無不可也。

而世有一種人、既仕而得禄、反嘐嘐然以不仕爲高、若欲棄之者。此豈其情也哉。故其經營、有甚于欲仕。或不得間而入、或故爲小異以去。因以遲留。往往遂竊名、以得美官、而不辭。世終不窮也。

有言。窮書生不識饅頭、計無從得。一日見市肆有列而鬻者、輒大呼仆地。主人驚問。曰、吾畏饅頭。主人曰、安有是理。乃設饅頭百許枚空室、閉之。徐伺于外、寂不聞聲。穴壁窺之、則以手搏撮食者、過半矣。亟開門、詰其然。曰、吾見此、忽自不畏。主人知其紿、怒叱曰、若尚有畏乎。曰、有。猶畏臘茶兩椀爾。

此豈求不仕者也。

サゲの言葉の茶が「臘茶」となっていることに、あらためて注目しておきたい。宋の時代、人々の関心を集めた高級茶という、先の布目潮渢『中国茶の文化史』の解説（注7参照）を思い起こせば、セリフの裏にある貧乏書生の心理が、落語「饅頭こわい」の場合とは些か異なることに気付こう。落語では、甘い饅頭を鱈腹食べたため、喉が乾いて茶を一杯という心理である。これに対して貧書生の場合は、「念願の饅頭が食べられた上は、さらに今評判の臘茶なるものも」という貪欲さである。恬淡さの裏に飽くなき欲望を抱えた官僚の喩えとしては、正に恰好の小咄と言える。

なお、『高等学校　古典　漢文編』は、結びの「此豈求不仕者也」の「豈」を、反語と説明している。そうすると一文の意味は「この小咄のような手合いが、どうして仕えないことを求める者であろうか」となろう。しかし、ここは推量の用法と取ることも可能と思われる。であれば、「この小咄の貧乏書生は、（いま話題にした）仕えないことを求める者ではないだろうか」の意味となる。後者の読みで如何であろうか。

10　同一内容の文が、他に『山中一夕話』にも見える。しかし、これは明の李贄（一五二七～一六〇二）の編と伝えられる笑話集で、時代は大きく降る。原書は未見であるが、王利器輯録『歴代笑話選』（上海古籍出版社、一九五六年）に節録され、「李卓吾先生編次、笑々先生増訂、哈々道士校閲」とある。同話は一五〇頁。『避暑録話』の文章を、そのまま借りたものと思われる。

11　『太平広記』の原文は、中華書局の点校本（一九八一年）によれば次の通り。

王瑤、宋大明三年、在都病亡。瑤亡後、有一鬼、細長黒色、袒著犢鼻褌。恒來其家、或歌嘯、或學人語。常以糞穢投入食中。又于東隣庾家犯觸人、不異王家時。庾語鬼、以土石投我、了非所畏。若以錢見擲、此眞見困。鬼便以新錢數十、正擲庾額。庾復言、新錢不能令痛。唯畏烏錢耳。鬼以烏錢擲之。前後六七過。合得百餘錢。

『述異記』には南朝斉の祖冲之撰、南朝梁の任昉撰の二書があり、この話は前者に収められている。

12　この時代の「新銭」と「烏銭」の貨幣価値については知識を欠くが、「新銭」は、おそらく乱造された質の悪い貨幣だったのであろう。「烏銭」についても詳細は不明。ただ、澤田瑞穂『金牛の鎖　―中国財宝譚―』（平凡社・平凡社選書、一九八三年）の「宝精零篇」には、「銭が怖い」のタイトルでこの話が紹介され、「烏金」を指すとすれば銅と金の合金で作られた貨幣であろうとの説明がある（二一一～二一二頁）。おそらく『大漢和辞典』の語釈に基づくものと考えられる（第七巻三九九頁、「烏金」の語釈の二）。しかし、これは「烏銀」のことを言うのではないだろうか。『漢語大詞典』によれば（第七巻七四頁）、「烏銀」は硫黄で薫炙し特殊な方法で溶鋳した黒色の銀。時代は降るが唐の孟郊「答友人贈炭」詩に、「青山の

白屋に仁人あり、贈られし炭は　價　雙烏銀より重し（青山白屋有仁人、贈炭價重雙烏銀）」と詠われている（『孟東野詩集』巻九）。

13　日本の昔話に関しては、稲田浩二『日本昔話通観　第28巻昔話タイプ・インデックス』（同朋舎出版、一九八八年）の「661何がこわい」「662宝物交換」や「663たのきゅう」「664石肥三年」を参照。因みに同書によれば、「たのきゅう」は次のようなあらすじ。

①旅役者のたのきゅうが爺に化けた大蛇と出会い、たのきゅう、と名乗ると、大蛇に、狸なら化けてみよ、と言われる。

②たのきゅうがかつらでさまざまな姿になると、爺は驚いてこわい物を聞く。

③たのきゅうが、小判がこわい、というと、爺は、たばこのやにがこわい、という。

④たのきゅうが爺にたばこのやにを投げつけると、大蛇はその夜たのきゅうの家に小判を投げこみ、たのきゅうは金持ちになる。

14　こうした話を集録したものとして、中国科学院文学研究所編『不怕鬼的故事』（人民文学出版社、一九六一年）がある。ただし、この書には「王瑤」は収められていない。

15　出来れば本誌の次号で取り上げてみたい。

16　『史記』巻六五・孫子列伝。訳文は野口定男『史記（中）』（平凡社・中国古典文学大系、一九六九年）によった。点校本二十四史によれば、該当箇所の原文は次の通り。

孫子謂田忌曰、彼三晉兵素悍勇而輕齊、齊號爲怯。善戰者因其勢而利導之。…（中略）　…使齊軍入魏地爲十萬竈、明日爲五萬竈、又明日爲三萬竈。

17　南宋の洪邁は、『容斎随筆』巻一三の「孫臏減竈」において、この話の信憑性を疑っている。彼が挙げる疑問点は、次の通り。①行軍の遅速は他人の計り知る所ではない。どうして必ず暮れにやってくると、時刻も違えずに予測出来よう。②古人は車中に坐したものである。日が暮れてしまったら、どうして白げた樹の文書に気づき、その上、火を起こしてこれを読んだりしようか。③斉軍の弩弓は（火を合図に）一斉に発射できるのに、「龐涓が八字を読み終えないうちに」というのは信用できない。

18　竹簡の整理研究の結果は、銀雀山漢墓竹簡整理小組編『孫臏兵法』（北京文物出版社、一九七五年）にまとめられている。邦訳としては金谷治氏の『孫臏兵法』（東方書店、一九七六年）があるが、近年これを底本として『孫臏兵法　もう一つの「孫子」』（筑摩書房・学芸文庫、二〇〇八年）が刊行された。同書から「十問」の一節を、例として引いておく。

軍事の質問として問う。たがいに軍門を張りあって陣営を構え、食糧はともに十分で、兵力も武器も同じていど、攻め手も守り手もどちらも勝利について懸念を抱いている。

こういう場合に敵軍が円陣を張って動かず、ますます陣を固めているとすれば、その攻撃は［どうするか？　答え、］それを攻撃するには、全軍の兵士を分けて四つか五つの部隊を編成し、その一隊で敵に近づいたうえでわざと逃げてひきあげ、こちらが敵を恐れているように見せかける。……　（一五八頁）

19　饅頭でとっちめてとの相談の際、「もしも大嫌いな饅頭の山を見て、死んじまったらどうしよう」と心配するくだりで使われる。あるいは、部屋の中が余りに静かなので、ひょっとしてショック死したのでは、と心配するくだりで使われる場合もある。

20　大意の紹介で済ませたので、点校本によって該当箇所の原文を示しておく。

後羌寇武都、鄧太后以詡有將帥之畧、遷武都太守、引見嘉德殿、厚加賞賜。羌乃率衆數千、遮詡於陳倉崤谷。詡即停軍不進、而宣言上書請、須到當發。羌聞之、乃分鈔傍縣。詡因其兵散、日夜進道、兼行百餘里。令吏士各作兩竈、日增倍之、羌不敢逼。

或問曰、孫臏減竈而君增之。兵法日行不過三十里、以戒不虞。而今日且二百里、何也。

詡曰、虜衆多、吾兵少。徐行則易爲所及、速進則彼所不測。虜見吾竈日增、必謂郡兵來迎。衆多行速、必憚追我。孫臏見弱、吾今示強、勢有不同故也。

［追　記］

「蠟面茶」の名は唐代の文献にも見えることを、澤崎久和氏（福井大学）から教示いただいた。『全唐文』巻九四の哀帝「停止貢橄欖勅」に「毎年　但だ蠟面茶を供進するの外は、橄欖子を進奉するを要さず、永く常例と為せ」とある。また『唐文拾遺』巻五八に収める闕名の「賜朝臣茶藥奏」（後唐天成四年・西暦九二九年）には、「宜しく各おの蜀茶二斤、蠟面茶二斤を賜うべし」と見える。晩唐・五代においてすでに、貢納あるいは下賜品として用いられていたことが分かる。

澤崎氏からは「饅頭」についても、『勉誠通信』第二九号（二〇一一年一月一八日）に小林祥次郎「饅頭の語源」の一文が見えるとの教示をいただいた。

『避暑録話』の訳文については、森瀬壽三氏（元関西大学）の指教に負うところが多い。ただ、拙訳をそのままにした箇所もあり、誤りがあるとすれば、その責は筆者にある。

落語「饅頭こわい」は、平成二三年度の小学校教科書に採用された。『小学生の国語　学びを広げる　五年』（三省堂）

本稿は、科学研究費助成による「小学校教員に必要な「古典力」育成のための教育プログラム開発」（基盤研究C　代表：三宅晶子　課題番号：21530919）の、研究成果の一部である。